

ヨハネ 5:19 そこで、イエスは彼らに言われた。「はっきり言うておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。

5:30 わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」

5:20 父は子をして、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。

5:28 驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、

5:21 すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。

5:29 善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。

5:22 また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。

5:27 また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。

5:23 すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。

5:26 父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてくださったからである。

5:24 はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。

5:25 はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。

24・25

23 26

22 27

21-20 29-28

19

30

皆様おはようございます。1月も早、あと1週間ほど残すところとなりました。日が長くなってきたのを感じるこの頃です。寒い日が続きましたが、皆様お元気でお過ごしでしたでしょうか今週は雪が雨に変わる、少し寒さが緩む週になるようで、ほっといたします。

さてヨハネの福音書も第5章後半までやって参りました。

上の所に聖句と共に、数字の表のようなものがありますが、この箇所を読み進めておりますうちに、繰り返しの表現があることに気づきました。

19節と30節、21節と29節、20節と28節、22節と27節、23節と26節、そしてピークが24、25節。そして、前の御言葉と後の御言葉が不思議と対になっています。そして階段上に登っていきピークを迎えまた降りていくという形です。先に聞いた事柄がもう一回繰り返されて戻っていく、そのような構造に気がつき、その強調されているところに目を見張る思いがいたしました。それはまさしくイエス様こそが救いの中心であると言う事の協調です。そのことを一緒に味わってまいりましょう。

19節と30節がまず最初に対になっています。

19 そこで、イエスは彼らに言われた。「はっきり言うておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。

30 わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」

ここで両方とも「自分からは何もできない、何事もできない」と共に共通して書いてある訳です。19節で、「子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。」とイエス様は語られるのですが、その後から30節では、それとともに、「ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」と、踏み込んだ内容で先の19節を補い、補強するその繰り返し、その強調として30節が語られているのです。

父から聞くままに裁く。自分の意志ではなくて、イエス様をお遣わしになられた父なる神様の御心を行おうとするから、私の裁きは正しいとイエス様ははっきりと語っておられます。自分からは何事もできない。神の子、神ご自身であられるイエス様でさえ、父なる神様を前にそのような姿勢でおられたとのことですが、それは人として、私たちのために来られた人のための模範としての姿です。それは私たちのために現してくださったお姿です。私たちも自分からは

何もできませんが、父がなさることはなんでも、子どもそのとおりにしようとするとき、祈る時、自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとする時、神様は私たちに御力を現してくださいます。ここにイエス様による救いの中心があらわされています。

そしてまた 20 節と 28 節も対比を成しています。

20 父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。

28 驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、

「あなたは驚くことになるよ」と言ってみたり、「驚いてはならない」と書かれていることに興味深く思います。

21 すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子ども、与えたいと思う者に命を与える。驚くことになるんだけど、それは驚くべきことではないのだ。

「わたしは自分では何もできない。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」

28 驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、29 善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。

人の子の声を聞き、善を行った者も、悪を行った者も復活し、復活して命を受けたり、裁きにあたりするという事がイエス様によって語られています。イエス様は、そのような声の持ち主であることが語られています。すべての死の中にある人たちを復活させ、善なる人に命を与えて下さるお方。それがイエス様です。

驚くことになるが驚くことでは無い。驚いても、驚くことではない。それが私たちの信仰生涯なのではないでしょうか。

先日も夜中に突然スマートフォンが鳴り響いて大きな地震が来ますとけたたましく告げ、びっくりさせられました。私たちの人生には驚くことがいろいろあります。私たちが先のことが分かりません。しかし驚く事はあるが驚いてはな

らないんだという事が示されます。すべて神様の御手の中にあるのだという事なのです。

神様は驚くような素晴らしいことを私たちの生活の中に表してくださいませ。贖い、私たち善なるものと数えて、いのちの中に導いてくださいます。

20 父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。

父なる神様は御子を愛して、驚くべき御業を御子に現してくださいませました。そしてご自身のなさること、これらのことよりも大きな業を子にお示しになられ、「21 すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える」ような御業を御子によって行われました。

そればかりではなくて、ヨハネ 14:12 にはこう書いてあります。

「はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。」

30 節にあります、「わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに…わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとする」とあり、神様のお遣わしになった方の御心を行うことならば出来るとイエス様は語られました。自分では何もできない。しかし、派遣の主なる神様のお心であれば成すことが出来るという事は、私たちにも共通することです。

「わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。」ということは、「驚くこと」ですが、しかし「驚く事は無い」という事でもあります。

「父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。」

そして私たちもまた神様に愛され、遣わされた方の御心を行い、贖いの主イエス様の御名により、死者の中から復活された私たちのために贖ってくださった方をお伝えする時、父が私を復活させ命を与えて下さったように、私たちがこの人に命を与えてくださいと祈り証に励む所の、その人は命を得るという事で、そういう事がここに記してあるのではないのでしょうか。

22 また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。
27 また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。

23 すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。
26 父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにして下さったからである。

主は裁きの権能をお持ちの方ですが、世は、この方を畏れることはありませんでした。命をお持ちの方ですが、その命にあずかろうとはしませんでした。この方をも、遣わされた方をも恐れずに、傲慢を極める人間は、命から遠く離れています。

ヨハネ 1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

1:9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

1:10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

1:11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

命を得ていらっしゃる方、永遠の命を得ていらっしゃる方、人を照らす光、人を救い出す命をお持ちになったお方が来てくださったのにもかかわらず、救い主を敬わないならば、どうなるのか。その救いの命を携えてこられた方をどのように私たち人間がを受け止めるかということが救いの中心であり、それは遣わされたイエス様だと言うことがここに記してあります。

そしてピークの 24 25 節です。

24 はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。

25 はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。

「はっきり言うておく」、「はっきり言うておく」と、ここに繰り返し記してあります。「はっきり言うておく」とは、原語ギリシャ語では、「アーメン、アーメン」と言う言葉で書いてあります。本当に真実に私はあなたに語ります

という意味です。私たちがお祈りの終わりに「アーメン」と言いますのも、「心から本当にそう思います」という意味ですね。イエス様は、この言葉を聞いて欲しい、この言葉は真実ですから、私の言葉を聞いて下さいと繰り返し語っておられます。

はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。

はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。

わたしの言葉を聞いてほしい。私をお遣わしになられた方は、天地を創造されたたまことの神。この方が私を遣わされたという事を信じてほしい。そして私と、わたしの言葉を信じてほしい。そしてその言葉に聞き従ってほしい。心の底からそのことを願い、あなたに伝える。どうかどうか聞いて、信じてほしい、心の底から、本当に分かってほしいと、このピークの所でイエス様は願っておられます。そうすれば、「永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。」と語られました。裁きの権能を持っておられる方が、「裁かれない」とはっきりと語っておられるのです。これくらいはっきりしたことはないのだと思います。また同じように、「はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。」だから私に聞き従ってほしいと重ねてイエス様はこのピークの所で語っておられます。

定かならざるところで、驚くようなことが数多く起こるこの地上の馳せ場で、「私に信頼していれば驚く事は無い。遣わされた方の御心を行う私の模範を見なさい。死んでも復活させられる私の姿を見て、あなたも「永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っていて、神の子の声を聞く、その声を聞いた者は生きる。」その人生を送っていることを確信なさいと主は語られます。主が共におられ、死が命に移し替えられた人生。「父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。」この人生の醍醐味を私たちはますますと知るようになるのです。

このイエス様こそが救いの中心です。その方の声を聞いて遣わされた方の御旨のために私たちも心を開いて進ませてもらいたいそのように願うのです。